

〈女の物語〉論のために

「世の中」の基底

辛 島 正 雄

今日の物語研究の最前線において、〈女の物語〉という術語にどれほどの有効性が認められているものかは、率直にいつてはなはだ心もとない。もちろん、すでに横井孝氏に『〈女の物語〉のながれ——古代後期小説史論』(加藤中道館、一九八四年)という好著があつて、筆者などつねづね裨益されてきただけに、必ずしも市民権を得ているようには見えない現状に、むしろ不思議の感さえもつのだが、たしかに〈女の物語〉というだけでは曖昧にすぎるのかもしれないし、目新しさにも欠けていよう。だが、それでもあえてこのことばに固執するのは、こう言う以外、そのアイデンティティを捕捉しがいように思われるからである。〈女〉のフィルターを通さねばその本性が見えてきにくい一連の物語——それを〈女の物語〉と呼ぶことで、より自覚的に相対したいと思うのである。

本稿は、そうした〈女の物語〉を考えてゆくためには、どうしても避けて通れぬと思われる根本的な問題について、筆者なりの整理・方向づけを試みようとしたものである。

「1」世の中」存疑

〈女の物語〉に限らないことだが、王朝物語の眼目は、当時のことばでいう「世」あるいは「世の中」を描くことにある。この性格認定そのものに異論はない。一方、物語にいう「世の中」とは、世間一般ではなく、〈男女の仲〉〈男と女の関係〉〈夫婦の間柄〉というふうな訳語が相応するような、いちじるしく偏った局面を指す場合の多いことも周知の事実である。そして、そうした偏りを生むのが、男と女の関係性をめぐる制度や慣習の上での当時特有の事情であることももちろんであり、したがって、「世の中」の理解にあたつては、わたしたちの男女観からするのではない、そうした事情についての精通が求められるわけである。だが、一般論としてはそうであっても、実際には、根本から「世の中」の内実が問い質されたことは、ほとんどなかったように思われる。もちろん、『源氏物語』の出現により物語が名実ともに女の文学となったことで、「世の中」についての認識も、作者自身が男中心社会での弱者たる女の側に

いるだけに、よりシビアなものになったとは、ごく常識的に言われることである。しかし、「世の中」に対する認識とは、初期の男の書く物語では概して楽天的で、その後女が書く物語では一転悲観的となる、といった、同質の問題についての、男か女かによる受け止めかたの軽い重い、いわば程度の差ということで片づけてよい底のものなのであろうか。思うに、「世の中」の内実の理解は、そこに時代特有の変数を加えるべきことはわかっていても、実際にはわたしたちの常識的な男女観とも大きくは違わぬものとして、特別問題視する必要もないとの判断のままに来たのではあるまいか。そして、「世の中」の実体を厳しく直視することを怠ってきた結果は、とりわけ女たちが物語の中で男女の関係性の基底におこうとしたものを、長らく見過ごさせることとなったように思われるのである。

〔2〕「世の中」が始まるとき

じつは、ここで考え直したい物語における「世の中」の内実の問題性については、すでに今井源衛氏によって行き届いた整理・考察がなされており、それが広く学界に認知されていさえすれば、筆者が今さらしく論じたるまでもないことなのである。「女の書く物語はレイブから始まる」というショッキングな（とほんとうはいってはいけない）タイトルの論文（同氏著『王朝の物語と漢詩文』（笠間書院、一九九〇年）所収）がそれである。

今井氏は、この論文と補完的な関係にある「もののまざれ」の内容」という論文（『源氏物語』を読む（笠間書院、一九八九年）

所収）において、「もののまざれ」ということばの使用が、「源氏物語の本文にはなく、その研究史の中において、実質的には、男性の暴力による女性の征服を指す言葉として、しばしば用いられてきているのであり、しかもその事自体、研究者や読者たちに、必ずしも十分には気付かれていない」（四二頁）とおさえた上で、次のように述べられる。

そして、源氏物語研究や享受の長い歴史の中で、今日まで、この矛盾にさして気がねもせずに過ごしてきた理由の最大のもものは、それに携わってきた人々——もちろんほとんど、大部分は男性であるが——が、犯される側の女性の立場に立つてふかく事を考えようとしなかったことにあるだろう。これらの語の持つ内容は多様であり、ある場合には和姦であり、ある場合には強姦である。この両者間の距離は、たとえ男性にとつては小さくとも、女性にとっては、妊娠の可能性を含んで甚だ大であり、それは女性の全存在を好い意味でも悪い意味でも、根底から揺さぶり立てずにはいない。「強姦」や「暴行」はその悪い側面を指す言葉ではあるが、源氏物語にはそれが多いことをはっきりと認識する必要があるだろう。

この紫式部が切り開いた新しい物語の世界は、その後の王朝物語によって、忠実に踏襲された。それらの作者はほとんどすべて女性であり、王朝物語のこの特質は、当時の女たちの生活や運命、またその間に養われた苦しい思念をまざまざと物語る点にある。

ここに暴露された恐るべき（と筆者は思う）事実——物語における「女」とは、端的にいえば、「男」により強姦され蹂躪される、そうした経験の上に自らの生を生きていくしかなく、そのようにしてできあがつた支配／従属の関係から逃れることはできない、との基本認識に対して、わたしたちはこれまであまりにも無頓着にすぎたのではあるまいか。このようなものを、誰が対等の恋愛関係などに見なしえようか。加えて男たちは、自分たちが一方的につくった関係をも、「宿世」や「前の世の契り」などと称して、女たちも受け入れるべきものと強要する。男支配の社会における男本位の性的関係が、女に対してきわめて差別的な仏教の運命観によってさらに裏打ちされると、女の自立性や主体性など、いとも簡単に踏みにじられて当然だった。しかし、それはおかしい、と気づいたとき、物語は一挙に変貌を上げた。そして物語は、そうした「女」の運命を見つめることで、書きつがれていったと思われるのである。

〔3〕「世の中」の認識——『蜻蛉日記』を例に

ただ、そうした男女の関係性に、女たちが当初から自覚的であったとは、もちろん思えない。女とはそのようなものだ、と社会が規定する以上、男に自らの犯罪者としての意識が希薄なだけでなく、女の方も、それを動かしがたい「宿世」と観念して、最初の出逢いに屈辱を感じることがあっても、いつしかそれも風化し、おおかたは自らの支配されている事実にも気づかなかつたのではなからうか。そして、必要悪としてその状況を

甘受するのみならず、さらには男の思う壺に、一種の結婚幻想にさえ取り憑かれるのだ。

『蜻蛉日記』の作者などは、そうした意味でいえば、正妻になれようがなれまいが、かの女が感ずる幸・不幸の実質に、さしたる違いが生じたとも考えられない。男の方は、はなからかの女ひとりを受さねばならぬという責任感も、それができないうときの後ろめたさもないのに、それでも「三十日三十夜は我がもとに」といふとき、それが心底発せられたものではないにせよ、かの女はすでに男との関係を当然のものとして受け入れているのであり、一個の女対男、一對一でわたりあっているつもりなのだ。これをもつて一夫一婦への悲願などと短絡させる気もないが、そうしたごだわりにとどまり続けることじたいが、女ゆえに軽んじられる自らの存在性についての自覚の欠如を、如実に示している。

一夫多妻という制度を無条件に受け入れて第二夫人となつていながら、「三十日三十夜は我がもとに」という、まったく矛盾した夫独占の願望を抱くこと自体がおかしいということに気付いていない。分別をこえた女ごころというほかはない。

というように皮肉られてしまうのも、故なしとしない。それは、女にとつては切実な問題のように思えても、男にとつては、「はいはい、分かつてゐるさ。君を一番愛してるよ」と言えば、それですんでしまうような底の問題だからである。

この日記についてのまじめな意義づけとしては、例えば、

一夫多妻の社会で権勢家の妻となった女の苦悩を、一つには同じ兼家の妻時姫（藤原中正の女）のような北の方の地位の得られない口惜しさとして、しかしより根本的には、そうした口惜しさとも分かちがたく融合した人生的な苦悩として表現した作品である。（中略）「はかなき身の上」を乗り越えていく唯一の方途として『蜻蛉日記』が書かれ、同時にその創作を通して、その身の上の自己認識を深めていったのであり、『蜻蛉日記』制作の意義は、このようにして作者の人生が、きわめて固有な形で、しかも本質的に把握されているところにある。

といった見解で代表させることができるなら、そこにいう「人生」を「本質的に把握」しているとは、男の目から見た憐愍の情、あるいは加害者意識が支える、過大評価というべきであらう。日記に現れるのは、男は、女は、かくあるべし、という、常識的な枠組みの中での、それゆえ抜け道の見つからない情念の奔騰である。よって、そんな女がいくらヒステリーをまわそうと、最初からすべての主導権を握っている男にとっては、鬱陶しくはあっても格別自らの存立の基盤を動揺させられるでもないのだから、嫌いでなければ適当に迎合しておだててやればよい。そうすれば女は、機嫌を直し、尻尾を振ってついてくる。そして、そんな底の浅さが見えみえだからこそ、男は、レイプした後世話をして脇目もふらず可愛がってやれば、女は幸せになれるのだ、といわんばかりの、女のご機嫌とりのような、もしくは「黙って俺について来い」的ヒロイズムを見せつけるよう

な物語（『落窪物語』のこと。⁶同じ継子いじめの『住吉物語』と比較するとき、その男権主義的傾向は鮮明になる）を書いたりもするのだろうか。この物語を、女君ひとりを愛しぬく男君が描かれているからとて、『蜻蛉日記』の作者の苦しみに象徴される女の悲願が実現している、などと評しては、それこそ楽天的にすぎるといわねばならない（もともと、近頃そんな単純な批評は目にしないが）。清少納言がこの物語をそれなりに気に入っているらしいのも（『枕草子』「成信の中將は」の段、人のよいかの女らしく、男と女の関係性の基底に疑念をもっていないからに違いない。同じ宮廷女房でありながら、その男たちをやりこめて喜々としている姿と、紫式部の男たちに対する態度との大きな落差は、それぞれの性格の反映ということもさりながら、根本的には、男とは女にとって何者であるか、ということについての認識の相違によるところが大きいのであらう。

〔4〕「世の中」の欺瞞性への自覚

男と女の関係性Ⅱ「世の中」をめぐっては、せいぜいその程度の認識しかなかった中で（才女清少納言も例外でなかった、突然変異的に（やはり、こういわざるをえない）その構造的な欺瞞——「世の中」とは女に一方的に困難をもたらす関係ではないことを暴露したのが、『源氏物語』であった。このことについては、最近、『源氏物語』についての最初のフェミニズム批評といえべき駒尺喜美著『紫式部のメッセージ』（朝日選書、一九九一年）が刊行されたことで、問題の所在がより鮮明になったといえる

だろう。今後は、好むと好まざるとにかかわらず、そうした男／女の差別構造と対峙しながら（なぜならこれは、わたしたち自身の切実な問題でもあるから）、《女の物語》全般についても読み直しを図ることが要請されよう。もちろん、『源氏物語』の世界のもつ特異な傾斜については、従来もさまざまに説かれてきたところである。が、紫式部を、ひとこと「フェミニスト」と規定してしまつたところに、新鮮な共感を覚えないうけにゆかないのである。

先の今井氏の発言にもあつたごとく、従来の国文学研究が、男中心の社会構造そのままに、あくまで男の価値観に立つて積み重ねられてきたものであることは、ありのまま承認されねばならない。この偏向は、女性研究者であればそこから自由であつたともいえないところに、問題克服の困難さがある。男と女の関係性に無自覚・無関心では、いかに同性であろうと、物語に隠顕する《女》の問題への共感が生まれようよしもないし、それどころか、伝統的な研究成果を上げ認められることで、むしろ男の権威を内面化し、その助長に加担してしまう惧れすら否定できない。とすれば、元来正統的（＝男が作つた）文学史の鬼子である《女の物語》の研究など、暗澹たる前途しか予見できないとしても、当然であらう。が、このことは裏を返せば、方法的自覚さえしつかりもつていれば、男の研究者であるがゆえに《女の物語》は本質的には分かれないうと、最初から絶望する必要もないということでもあらう（と思う）。げんに、「今日の我々にとって異様に見える結婚の形態について、いささか考えてみ

たい」（前掲今井著者一九二頁）ということから、「紫式部は、多くの女たちが結婚に際して味わう身心のせつなさを書いたのだ」（二〇四頁）との結論を、同情とも後ろめたさとも無縁に、具体的な物語解説を通して導き出したのは、男性である今井氏なのだから。

〔5〕「世の中」の基底——「強姦のパラダイム」

それはともかく、今井氏は、先の一見際物的に見えるタイトルの論文において、『源氏』『寝覚』『狭衣』『今とりかへばや』『我身にたどる姫君』といった物語での、いわゆる男と女が「逢う」場面の描かれかたの特異性を通観しておられるのであるが、『狭衣物語』の主人公の女二の宮に対する態度を述べた上で、次のように指摘される。

今日からみれば、あまりなまでの卑劣で無責任な主人公の姿であるが、作者としては、彼がそれほどにまで、たとえ他の女性からどんなに恨まれようとも、源氏の宮に一途な恋心を抱いていて、それを貫きたかつたのだつたと言いたいのである。しかし、それにしても、この設定には無理があり、作者にこの無理を強行させたものは何なのか。

あるいは、作者の脳裏には、はじめにレイプがありき、とでもいったことがあつたのではないか。源氏や寝覚の女主人公たちが歩いた道を女二宮も歩かされた。それこそ當時もつとも女が作るにふさわしい話の筋だったのであらう。レイプにひきつづく懷妊、出産、育児、またその相手

の男との複雑微妙な愛憎絵図のはてしない展開など、それは狭衣物語の書かれた院政期には、女の書く物語の定形に化しつゝあつたのではなからうか。だからこそこのような無理も、読者にはさほどの抵抗感を与えなかったのではないのか。レイプという有力なモチーフの前には、それによって主人公狭衣の人間性が多少傷付けられようとも、読者に迎えられるという点ではさしたる影響は無かつたであらう。無名草子がこのことについて一言の非難も加えていないのもその為ではなからうか。

二〇六—二〇七頁

いわれるとおり、物語における男女の出会いとは、そのほとんどが男の暴力によって一方的に開始されるものだったことに、反論の余地はないはずである。それを従来は、

彼（狭衣のこと——筆者注）は従妹に対する近親相姦の恋がかなえられないという心理的理由のために、ある皇女（女二の宮のこと——筆者注）との結婚を拒否するのだが、しかもその皇女と密かな恋愛関係を生じて、子供を生ませてしまふ。（傍線筆者）

などという事実誤認も甚だしい捉え方をして、すました顔をしていたのだ。

ただ、これを「レイプという有力なモチーフ」という言い方に集約するとき、少々ことがらの本質を曖昧にしまった憾みが残るのではないだろうか。「作者の脳裏には、はじめにレイプがありき、とでもいったことがあつたのではないか」ということは、当時の社会での女の置かれた状況についての物語作

者の認識がそのようなもの——レイプによって「世の中」は規定され、女の生は男に蹂躪される——だったと推察されるということであり、そうした認識に立つて「世の中」の物語は展開するのだということを、はっきり弁えてかかるべきだ、ということであらう。つまり、レイプとは、たまたま不幸な女にふりかかる災厄であるのではけつしてなく、当時の「世の中」における構造的・根源的な問題なのだ、ということを見抜いていた結果の表れだったらしいのである。

ここで、「強姦の加害者と被害者」という対にたいして社会が抱いている幻想」について、フェミニストの心理学者である小倉千加子氏が、「強姦のパラダイム」と命名して説かれるところに耳を傾けてみよう。

男性は女性よりも性的欲求が強く、時としてそれをおさえられない動物である。したがって、女性が無神経に男性の性欲を刺激するような態度を見せると、男性は衝動的に犯罪に走ってしまう。ために女性は、そのような、男性にとつても不慮の事故を誘発しないために、深夜に一人で出歩かないで家の中にいて女らしい仕事に精を出すか、もしくは知っている男性にエスコートしてもらつて外出しなければならぬ。もし女性が強姦の被害にあつたとしたなら、それは今述べたような原因によって彼女もある程度その暴行に連座していると見なされる。彼女がその内部に犯罪を誘発する属性を持っていなかったかどうかは、その言葉の重み、性格の堅実さ、過去の性生活での貞淑さ、洋服、など

によって証明することができる。つまり強姦にあつては男性の側は生物学的オスとしての条件があらかじめ十分に理解されているため、彼の行動についての説明はいっさい考慮されることはない。女性たちには、幼ない頃から、男性の性行動に関する常識をよく教え、自らの身を守るための知恵を学ばせる必要がある（『セックス神話解体新書性現象の深層を衝く』〈学陽書房、一九八八年〉一三二―二四頁）

そして、このことの意味は、「被害を被った責任は被害者自身にある」、もつと端的には、「強姦はされるほうが悪い」ということだ、という（二四頁）。なるほど、と思わないわけにゆかない。女三の宮などについての従来さまざまな言説が、ただちに想起される（レイプの被害者として女三の宮に同情した論者が、これだけいたらうか）。今井氏があえてタブー（？）を冒すまで、国文学史上の至宝『源氏物語』のヒーローを、誰も連続強姦魔（レイプ・マニア）だとは言わなかったわけだ。小倉氏はさらに、

性的暴力というのはどこかの人通りの少ない暗闇で行なわれる個別的な事件ではなくて、郊外の一戸建ての家のなかでも、残業している会社のオフィスのなかでも起こっている社会的、制度的な暴力であつて政治的行為に他ならないのです。これこそが、性を通じて男が女を支配する歴史的、全世界的規模の犯罪です。女性は一人の例外もなく性的奴隷制の被害者であるというふうに定義しなおさなければなりません。（三三頁）

と敷衍される。くどいほどに引用を続けたが、もうおわかりい

ただけだろうか。レイプを物語に現れる「世の中」の問題の基底にひき据えようとする筆者の視点は、奇矯な考えでもなんでもなく、文学研究から男中心主義（あるいは男至上主義）のイデオロギーを外したとき、おのずと開けてくるはずのものなのである。しかも、当の物語作者にすでにそうした自覚があつたと考えられるからには、研究者の側の意識の変革こそが急務となる。

それにしても、そのような〈女の物語〉が描く世界のかなたに望み見られるものはなにか、となれば、ほぼ見当がついてきそうだ。パラダイムの転換——今日流にいえば、こういうことにならうか。

さて、先に今井氏が「無理」を感じられた『狭衣物語』の主人公の描かれ方の問題であるが、じつはなんら不合理はないのである。要は、「世の中」の欺瞞性に目覚めた作者の手にかかるとき、かれがいかに理想的に見えようと、かれが男である限り、女と交わろうとすることは、すなわちレイプなのだ。それは、〈男／女〉が〈支配／従属〉の関係にそのままスライドする社会では、必然なのである。女たちは、それでもこの世で生きてゆけば（というより、生きるしかない以上）どうなるのか——『源氏物語』に始まる〈女の物語〉とは、畢竟、「世の中」についてのかくも忌まわしく救いがたい状況認識から紡ぎ出されるものなのだというところに、わたしたちは鈍感であつてはならないと思うのである。

〔6〕『源氏物語』の書き残したも

こうして見ると、男と女の関係性の基本については、すでに『源氏物語』において、あまりにも絶望的な結論が導き出されていた。先の駒尺氏の要約を借りれば、「この世においての男女関係の力学では、結婚と幸せの同居は不可能なことを浮かび上がらせた」(六頁)、「どのように男女が主観的に愛し合っているか、男女が分断されているこの社会の構造と文化形態、生活様式の中では、どうしようもなく、いすかの嘴^{クビ}のくいちがいに^マなってしまうことを描き切っている」(二三四頁)ということになる。

作家の三枝和子氏は、近著『恋愛小説の陥穽』(青土社、一九九一年)において、漱石以下の男性文豪の作品における女性観の偏向を抉り出す中で、「女自身の考えかたを突きつめて行く」と、そもそも女流作家の書く男と女の関係小説は、恋愛小説にはならないで、恋愛不可能小説になるのではないか」(二六六頁)との見通しを述べておられるのだが、「女の物語」のゆくえをながめていると、「なるのではないか」どころではなく、どう見てもそうとしか読めそうもないのである。『源氏物語』も、巷にいう華麗なる恋愛絵巻などではなく、荒涼たる恋愛不可能絵巻とでも称すべきであろう。

それにしても、『源氏物語』がここまではっきり結論を打ち出した上は、それ以上いいたいなにを付け加える必要があるというのか——このような疑念が湧くのも自然であろう。物語史は『源氏』以後にこそ隆盛を迎え多彩さを加えるというのに、

やはりよくいわれる二番煎じということになるのだろうか。しかし、幸か不幸か、紫式部は男女分断の現実と、その必然の帰結としての、女に男との関わりによって幸福などもたらされないことは書いたけれど、男と女をまともに対決させることは避けた。主要なヒロインである紫の上も宇治の大君も、その死によって男の手の届かぬところに去るまで、男からの逃走を具体化することはなかった。その意味で、最後のヒロイン浮舟の存在は異色であるが、その思い切った男からの離脱を可能にするために、他のヒロインたちとは次元を異にする作者の周到な用意があったことは、瞭然たるものがある。すなわち、清水好子氏が、「本能的に女である以外、じつに無内容」(『源氏』の女君増補版)塙新書、一九六七年、一四六頁)とされるごとく、一個の女としての存在価値をあらかじめ剝奪されていて、男から軽視されてしかるべきものと最初から明瞭に規定されていることが、決定的に違うのである。ここには、女の側からの甘い幻想の入り込む余地など、もとよりなかった。物語の幕ぎれの、浮舟というちっぽけな女に身分ある誠実な男までが捨てられる異様な構図に、紫式部が最後の最後に放った痛烈かつ決定的なアイロニーが、こめられているわけであろう。

紫式部の盛りこんだ「世の中」をめぐるこうしたラディカルな主題性を、『源氏』以後の物語が真正面から受け止めていたらしいことは、今日のようなフェミニズムの思潮や自我の目覚めから無縁な時代のことだけに、「女」の生き方を見つめる作者たちの目が、強烈な自意識に支えられて、「男」との関係

性を絶えず相対化しようとしていたであろうことを窺わせる。その後、正統なる『源氏』の末裔たちは、必然の流れのように『源氏』で踏み込むことのなかった男女対決の構図を深めてゆく。その記念碑的作品が『夜の寝覚』であり、以降も『今とりかへばや』『在明の別』と尖鋭の度を加えてゆき、鎌倉時代の『我身にたどる姫君』においてそうした一連の思考実験の極点に達するようなのだが、その詳細は別稿に譲る。

(一九九一年十一月稿)

注(1) 原題「女の書く物語の発端」〔初出『源氏物語の思想と表現 研究と資料』古代文学論叢第十一輯〕武蔵野書院、一九八九年〕を改められたことについては、「もしや読者にいかかわしい印象を与えはしないかと惧れるところが私にも無いわけではない。しかし、あえてこの題名に執する理由も、私なりにあるつもりだ」(あとがき)三三二頁とある。

(2) 森藤侃子「女の宿世——夕霧巻の雲居雁と落葉の宮——」(同氏著『源氏物語——女たちの宿世——』松風社、一九八四年)所収は、「宿世」とは、

「さるべき宿世」「のがれわびぬる宿世」として、この時代の人々の心に深く根付いていたと思われる」(二九三頁と説く。

(3) 柿本愛校注『蜻蛉日記』(角川文庫、一九六七年)八九頁。

(4) 暉峻康隆著『日本人の愛と性』(岩波新書、一九八九年)五七頁。

(5) 『日本古典文学大辞典第一巻』(岩波書店、一九八三年)「蜻蛉日記」の項(木村正中氏担当)。

(6) なお、今井氏は、

善良でやさしい女性が、不幸の境遇の中から救い出されて幸福になる物語の中に、男が力づくで彼女を征服するという筋書きが入りこむことは困難であろう。(前掲書一九三頁)

とし、女君が男君と初めて逢う場面をとくに取り上げておられないのであるが、

女、恐ろしく、わびしくて、わななきたまひて泣く。(中略)ただ今も死ぬるものにもがたと泣くさま、いとみじげなるけしきなれば、わづらはしくおぼえて、物も言はで臥いたり。(稲賀歌二校注『落窪物語』(新潮日本古典集成、一九七七年)二九一三〇頁)とあるのが、強姦以外のなにものであるうか。

(7) 中村真一郎著『色好みの構造——王朝文化の深層——』(岩波新書、一九八五年)一一九頁。

〔付記〕本稿は、第八三回古典談話会(一九九一年五月八日開催、於九州大学文学部)での口頭発表資料「『女の物語』の諸問題」から、枕の部分を抜き出し改稿したものである。なお、『源氏』以後の『女の物語』のゆくえんについては、『堤中納言物語』とりかへばや物語(新日本古典文学大系26、岩波書店、一九九二年)の解説で一部素描を試みたので、参照されたい。

(からしま・まさお 九州大学教養部助教授)